

ナ イ チ ン ゲ ー ル

— 看 護 の 成 立 —

高 田 熱 美*

はじめに

フロレンス・ナイチンゲール、科学を導入して看護を科学として成立させ、看護を専門的職業にまで高めた人、近代看護の創始者という。わが国においても、看護専門学校にはナイチンゲールの誓詞が玄関や廊下の壁面に掲げられ、その著作が紹介されている。著作に関する著述も多い。ただし、いずれも解説か啓蒙の著述で、研究されたものは少ない。

研究の著述といえるものでも、ナイチンゲールは近代看護の創始者であるとする、その歴史的意義が示されているだけで、看護の意味が探究されているわけではない。いまでは、ナイチンゲールの研究は完了したかにみえる。

たしかに、ナイチンゲールが看護に科学の知見を取り入れて以来、科学は急速に進歩している。それゆえ、ナイチンゲールの意義は歴史的意義に限られるのであって、ナイチンゲールが語る看護自体には学ぶべきものはないとするのが、一般的見方であろう。したがって、現在、看護研究にナイチンゲールを見ることはほとんどない。ちなみに、わが国の看護研究のなかで、最も活動的な「日本看護科学学会」では、発表演題が毎年 500 に及んでいるが、ナイチンゲール

* 福岡大学人文学部教授

ルが取り上げられたことはない。ナイチンゲールは、その誓詞が語るように、看護の精神を鼓舞するために供されてきた。誓詞はスローガンであったのである。本格的な研究はなされなかったというほかはない。

なぜ、研究がなされなかったのか。その理由は、ナイチンゲールの著作とそれを学ぶ者の双方にある。周知のように、看護に関するナイチンゲールの主著は『看護覚え書』であるが、これは体系をもった論述、いわば研究の書ではない。ここには、看護の目的、領域、内容、方法、看護師と患者の関係、医学と看護の機能などが整然と述べられているわけではない。これは、書名が示すように、看護に関する覚え書(Notes on Nursing)なのである。「この覚え書は、看護の考え方の法則を述べて看護婦が自分で看護を学べるようにしたのではけっしてないし、ましてや看護婦に看護することを教えるための手引書ではない。これは他人の健康について直接責任を負っている女性たちに、考えのヒントを与えたいという、ただそれだけの目的で書かれたものである。」¹⁾「私は、女性たちにいかに看護するかを教えようと思っていない。むしろ、彼女たちに自ら学んでもらいたいと願っている。そのような目的のもとに、私はあえてここにいくつかのヒントを述べてみた。」²⁾

ナイチンゲールは、考えるヒント、学ぶヒントを書きたかったのである。すなわち、「看護覚え書」は研究の対象になることを期待して書かれたものではなかったのである。

それでは、「看護覚え書」を研究対象として、そこから一般的意味ないし理論というべきものを導き出すことができるであろうか。それが可能となるには二つの条件が要る。一つは「看護覚え書」が、看護にとって意味あるもの、すなわち普遍的なものを語っていること、もう一つは、そのようなものがあるとすれば、学ぶ者がそれを発見し、取り出し、明らかにする方法をもっている、ということである。もちろん、本論はそれが可能であるとの前提に立って探究される。

1 方法

学ぶとは、基本的には、一般的な意味、すなわち知識ないし原理を理解することである。したがって、「覚え書」に記されている具体的発言ないしヒントから学ぶには、何らかの方法が要るであろう。この方法は個々の具体的事物から抽象的な法則を導きだす帰納法のようなものではなく、もっと現実的なありふれた方法であろう。あまりにもありふれているということで、かえって、特殊な方法であるともいえる。ちなみに、ヴァン・デン・ベルクは、それを特殊な心理学的方法と称したことがあったが、そういってもよい。

周知のように、帰納法は生命あるものにとって根本的な働きであって、それ自体が正当化されるようなものではない。帰納法は、生命が長い進化の過程で獲得した能力であったといえる。それは生きのびるための能力である。空腹の時に、濃いコーヒーを飲むと胃が悪くなることがある。これは、経験をくりかえすうちに学んだ知識である。あるいは、晴天の夜の明け方は冷え込むとかフグの内臓を食べると死ぬことがある、といったことは帰納的に学んだ知識である。

帰納法は、物事の推移、原因・結果を見ることには有効である。しかし、人間の行為に関しては無力である。人間の行為は限りない意味の織物である。大脳生理学の観点からいっても、ヒトの脳には千億個の神経細胞(ニューロン)があり、その樹状突起がほかのニューロン軸索と接合する部分(シナプス)は千兆個に及ぶという。こうした脳をもった生命が相互にかかわる。ここには、間断なく意味が創造される。感情、知性がはたらき、芸術、歴史、科学、宗教が生まれる。このような重層的な意味の織物のなかでは、行為は、繰り返されるものであっても、決して同じものではない。三度の食事朝に顔を洗うことも、毎日繰り返されているが、同じものはどれもない。繰り返されるあいさつもそうである。あいさつをすると、ほとんどの人はあいさつで応える。ここには、親しみや感謝もあるが、なげやりなもの、時には敵意があることもある。行為

はみな違った意味をもっている。意味の世界には抽象的な事物の繰り返しごときものはない。これが、人間の行為に帰納法が適用されない所以である。

ナイチンゲールは「考えるヒント」を与えたいと語った。「看護覚え書」にはそのヒントが語られている。そのヒントから、どのようなものを学ぶことができるか。これは、ナイチンゲールが語ったヒントからヒントを、すなわちヒントのヒントを学ぶことである。

もちろん、これを学ぶには、帰納法ではなく、それと全く違った方法によらねばならない。それは、人間の行為をありのままに見て、そこに意味を見出す現象学的方法である。

ナイチンゲールの「覚え書」は看護およびその環境について、実にこまごまとしたことを語っている。これは、まさに「覚え書」が看護の自明的現象を起点にしていることを示している。そうであるからには、「覚え書」は現象学的方法によって明らかにされるはずである。

2 環境内存在

ナイチンゲールが語る「覚え書」は、現象学的方法によって明らかにされ、その意義を鮮明にするはずである。もっとも、このことは、ナイチンゲールが学問としての現象学に通じていたということではない。ナースは、現象学を知らずとも、豊かな看護を十全に行うことができる。重要なことは看護そのものにある。すなわち、ナイチンゲールが語る看護師が生み出す看護および看護環境が、病人にとって自明的な意味をもっていることが重要なのである。このことで、ナイチンゲール自身はいうまでもなく、「覚え書」の看護師も直感的に現象学的見方の地平にいたのである。この点で、かつてヴァン・デン・ベルクが、ナイチンゲールが語るナースは、生まれながらの、行動する現象学者である³⁾、としたのも諾うことができる。

ナイチンゲールは語る。「良い看護を構成する真の要素は、健康のためのも

のも、病人のためのもの同様に、ほとんど理解されていない。」⁴⁾ これによれば、看護は病人にも健康な人にも関与する。ナイチンゲールにおいては、病人と健康な人とは連続している。両者は、同一線上にそれぞれ位置を占める二つの点、いわば相対的な関係のものである。それゆえ、「健康の法則、すなわち看護の法則」とされる。つまり、看護は、そもそも病人に対するものであるが、病人と健康人とは連続していることにおいて、健康の法則が生きている。かくして、「すべての病気は、その経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれ、その性質は回復過程(reparative process)」⁵⁾ であるということになる。

ナイチンゲールは、健康人と病人とを連続する過程と見ることによって、看護を病人のみならず健康人にも広げた。それゆえ、看護の対象は乳幼児、妊婦、老人、そして成人にも及ぶのである。

それにしても、病人と健康人とが共に生の連続する過程にあるとはいえ、病気が「回復過程」であるとするのは、どのような意味であるのか。病気は、生命の衰退過程ではないのか。生命の衰退として病気が現れ、またその病気が衰退を速め、やがて終末に至るとというのが実相ではないか。とすれば、病気が「回復過程」であるとするのは矛盾した言明であるといえないか。

ナイチンゲールは、「われわれが病気と呼んでいるこの回復過程」⁶⁾ に関して、「過程そのものの中断が起こる」⁷⁾ という。これからすれば、回復過程が中断されて、その中断が持続すると「生命力の消耗」に至り、衰退するということになる。それゆえ、ナイチンゲールにとって、回復過程としての病気の中断は「生命力の消耗」⁸⁾、すなわち衰退過程への転換となる。したがって、病気の中断とは、人為的条件によって回復過程が止まること、それが、やがて消滅し、それに代わって、衰退過程が現れる。かくして、ナイチンゲールにおいては、回復過程としての病気と生命の衰退ないし破滅過程とは非連続である。もちろん、老化や老衰はいずれの過程にも入らない。これらは自然の成り行きである。

ナイチンゲールは語った、「自然がつくり出し、われわれが病気と呼んでい

るこの回復過程」⁹⁾と。これによれば、病気は自然の配慮ということになる。よって、自然の配慮から離脱した時、生命は回復過程から衰退の過程というラインに変わったのである。ただし、現実の病人がいつの時点で回復から衰退のラインに変わったかを見切ることは容易ではない。仮に、衰退の過程にある者でも、その都度、ある時点で、衰退から回復の過程に変わり、それが数時間あるいは一日続き、そして衰退の過程に変わり、再び回復に変わるということもある。であれば、回復過程が完全に消滅するとはいえないのである。それゆえ、看護はつねに生命ある者に働き続ける。ナイチンゲールは看護をこのように見ていたと解することができる。

ナイチンゲールが、病気を「回復過程」と見るとき、ここには自然の働きが確認されている。ナイチンゲールは自然の働きを随所で語る。「笑うだけの体力もないばあいもあるが、そのとき患者に必要なものは、自然が与えてくれるあの感銘なのである。」¹⁰⁾ ちなみに、花、「その形や色彩は、いかなる議論や詮索にもまして、患者から苦悩をぬぐい去ってくれる。」¹¹⁾ さらに、自然の働きが強調される。すなわち、病気を「癒すのは自然のみである。」¹²⁾ 「傷を癒すのは自然なのである。」¹³⁾ 「病気とは、私たちが自ら招いてしまったある状態に対する、自然の思いやりのこもったはたらきと考えられないであろうか。」¹⁴⁾

ナイチンゲールが語る自然は、治癒力であり、しかも病気という事態において、人間に正常な生活の大切さに気づかせ、そこへ立ち返るように教え諭す働きである。したがって、この自然は、デカルトやフランシス・ベーコンが見たような自然ではない。むしろ、ナイチンゲールの自然はルソーやヒューム、それにアダム・スミス、あるいは詩人ワーズワスが見たような自然に近いであろう。これは、心的で、創造する有機体的自然というべきか。

この自然のなかに人間は生き、そのなかで病む。病気は広大な心的有機体的環境のなかで現れたものである。したがって、ナイチンゲールが語る病気はたんなる疾患ではない。疾患は病理学ないし医学の対象であるが病気はそうでは

ない。「病理学は病気によって人体組織に最終的に起こった変化を教えてはくれるが」¹⁵⁾、病気の「変化の兆候」¹⁶⁾についてはなにも教えない。「病理学は病気がもたらした結果の異常を教えはするが、それ以上のことは何も教えはしない。」¹⁷⁾ また、「多くの人びとは内科的治療がすなわち病気を癒す過程であると思っているが、そうではない。内科的治療とは、外科的治療が手足や身体の器官を対象としていると同じに、身体の機能を対象とする外科的治療なのである。内科的治療も外科的治療も障害物を除去すること以外には何もできない。どちらも病気を癒すことはできない。」「内科的治療は、自然がその障害を除去することを助ける働きはするが、それ以上のことはしない。」¹⁸⁾

ナイチンゲールは身体にある障害物の除去と病気である身体の治癒とを明瞭に分けたのであった。もちろん、治癒は自然が行う。この自然の働きに配慮するのが看護である。それゆえ、ナイチンゲールは、「自然が患者に働きかける最も良い状態に患者を置くこと」¹⁹⁾ としたのであった。そして、「人びとは、内科的治療こそ「必要不可欠」にして万能であると信じ込んでいる」²⁰⁾ が、「このような思い誤りを追放し、真の看護とは何であり、真の看護でないものは何であるかをはっきりさせる」²¹⁾ と明言した。真の看護とは、まさしく、病気を環境全体のなかでとらえ、そこで働く自然に配慮することであった。

ナイチンゲールにおいては、人間は環境内的存在であった。真の看護はこのなかで現れる。それゆえ、当然のことながら、病人が生きる環境全体に看護は向けられる。

周知のように、「看護覚え書」は次のような項目から構成されている。すなわち、「換気と保温」「住居の衛生(Health of Houses)」「小管理」「物音」「変化」「食事」「食物の選択」「ベッドと寝具類」「陽光」「部屋と壁の清潔」「からだの清潔」「おせっかいな励ましと忠告」「病人の観察」である。

これを見ると、ヴァン・デン・ベルクならずとも、「ナイチンゲールは、患者さんを治すよりも、部屋を治そうとしているかと思うくらいだ」²²⁾ といった

くなるであろう。

「覚え書」とはいえ、ここには実にこまごまとしたことが丹念に書かれている。ちなみに、「窓は、その下部ではなく上部を開けること。上部の開かない構造の窓のばあいは、ただちに改修すること。ふつうの広さの二人部屋であれば、冬季で1—2インチも開ければ充分である。」²³⁾「湯たんぽは、素手で触れて心地よく感じる程度以上の温度であってはならない。」²⁴⁾「室内で立ち止まっているときに微かな風の動きが頬に感じられるくらいでなければ、看護婦はその部屋の空気の清浄度について満足してはならない。」²⁵⁾「家の隣で建築の足場を築いているような大きな音には一般に耐えられるものだが、そんな患者も、ドアの外の話し声、とくに聞き慣れた人のささやき声などにはとても耐えられない。」²⁶⁾「患者が温厚な性質のひとであれば、ほかのことに自分の気をそらしてその話を聞かないように努力するであろう。これがますます事態を悪化させるのである。というのは、そのような心配りと努力は、その時は何ともなくても、何時間か後には必ず容態を悪化させるほど強い緊張をもたらすからである。まして、これが病室内でのひそひそ話となると、もう残酷以外の何ものでもない。患者が本能的にそれを聞こうとして、いやが上にも緊張を高めることは避け難いからである。これとまったく同じ理由から、つま先立ちで歩いたり、何をするにしても病室内でことさらにゆっくりした動作をしたりすることは、患者に害を与える。しっかりした軽やかで敏捷な歩調と、着実にして素早い手の動きが切実に求められているのである。のろのろ、こそこそした忍び足や、おずおずと頼りなげな手つきなどはいけない。これはよく間違えられることであるが、ゆっくり動作することがすなわち優雅なのではない。敏捷と軽やかさと優雅とは、互いにまったく矛盾しないのである。」²⁷⁾

患者は環境内存在である。病気であるとしても、意味としての時間と空間のなかに生き、そのなかで環境に出会い、創造する存在である。それだけに、音の大小ではなく音が意味するもの、つまり、ひそひそ話やささやきなどは、患

者をその世界から剥離するものとして、悪臭や寒暑、身体の汚れと同様に有害である。

かくして、ナイチンゲールが語る看護は心身ないし物心のすべてに行き渡る。長い間、ひとつの部屋に閉じ込められ、その心身が圧縮されているような患者には、「美しい事物」²⁸⁾ は心身を解き放つ。「（これは私自身のばあいであったが）病床に一束の野の花が届けられたときのこと、そしてそれ以来、回復への足どりがずっと速くなってきたことを、今もありありと思いだす。」「この効果は、たんに気分的なものにすぎない、人びとは言う。しかし、けっしてそんなものではない。効果はまさに身体にも及ぶのである。」²⁹⁾「患者の眼に映るいろいろな物の、その形の変化や色彩の美しさは、それは、患者に回復をもたらす。」³⁰⁾これは、音楽についてもいえる。「病人に音楽を聴かせることの効用」³¹⁾ も忘れてはならない。

さらに、皮膚をていねいに洗ってもらうことも同様である。そのとき、患者にもたらされるものは、「ちょっと気分が良くなる」³²⁾ といったことではない。それは、開放感や安らぎであって、これは、「生命力を圧迫していた何ものかが取り除かれて、生命力が解き放たれた、まさにその徴候のひとつなのである。」³³⁾

自明のことながら、看護は患者の不安にも向けられる。「およそ患者にとって、気がかり、半信半疑、時間待ち、不意打ちへの不安などによって生じる心身の消耗は、ほかのどんな消耗よりもはるかに有害なのである。」³⁴⁾

こうして、ナイチンゲールは環境内存在としての病人の看護を語った。この病人は心身の統合された心的有機体である。ここには、デカルトおよびその衣鉢を継ぐ近代科学が唱える心身の乖離はない。

3 看護

ナイチンゲールは、近代科学を看護に導入した人として、近代看護の設立者と称される。事実、その看護には、近代科学の成果が取り入れられている。

「看護覚え書」には、公衆衛生学、細菌・感染症学、精神・心理学、化学、内科・外科医学、そして統計学の知識を随所に見ることができる。これによって、ナイチンゲールが近代看護の設立者と称されるのも諾うことができる。とはいえ、これだけであれば、これは歴史の上での評価に終わり、科学が進んだ現在では、ナイチンゲールの看護は乗り越えられている、ということになる。したがって、その看護から学ぶことはなにもない。要するに、その看護は時代遅れである、と見るほかはない。

ナイチンゲールの真価は、その「覚え書」に明瞭に示されている。それは、看護に科学を導入したことなどではない。すでに、見てきたように、ナイチンゲールは近代科学に依拠する医学の限界を指摘していた。医学は病人の局部（疾患）しか見ないのである。「病床において自然は、生きた化学、あるいは回復の化学というものが、実験室の化学とは違うことを、私たちに教えてくれる。有機化学が、他のあらゆる知識と同様に、私たちが自然現象を見つめるときに役立つことは確かである。しかし、だからといって、疾病の経過のなかで進行している回復過程についても実験室で学ぶべきだ、ということにはけっしてならない。」³⁵⁾ ちなみに、患者の食事に関して言えば、「もっとも肝心な問題は、患者の胃は何を吸収できるかということ、つまり患者の胃は何から栄養を摂取できるか、ということであり、しかもこれを判定するのは患者の胃だけである、ということである。化学はこの問いに答えられない。」³⁶⁾ 「患者に何を食べさせるかを決める立場のひとの職務とは、あくまでも患者の胃の意見に耳を傾けることであって、『食品分析表』を読むことなどではない。」³⁷⁾

このように、病人は環境内存在であって、実験室や知識のなかに住んでいるのではない。病人は、環境に触れ、共に生き、働きかけられ、また、自ら働きかける。これは、自己同一性を保ちながら、他方では、自己の境界を消去して、環境同一性を生きる。たとえば、環境としての空気は、病人の外にありながら、病人に吸収されて体内に入ったとき、病人の身体そのものになる。空気も水も

食物も病人の他在でありながら自在である。両者の区別は、環境内存在としての病人にはない。両者は、鳥と空、魚と水が共にその存在を可能にするように、生きることにおいて不可分なのである。

ナイチンゲールは、病人を環境内存在と見ていたので、環境のあらゆる面にわたって、こまごまとしたヒントを語ったのであった。そこでは、見舞い客のあり方にまで触れられている³⁸⁾。もちろん、これは、「考え方のヒント」であって、ヒントそのものではない。病人の現実には、ヒントを語ることは不可能なことであった。病人は変化する環境を生きる「個別性」³⁹⁾である。これは、環境すなわち自然および意味的世界が収斂した独自のものである。ゆえに、「病人をあずかっている責任者に、《管理》するとはどうすることかを書物で教えようとしても、それはちょうど看護の仕方を書物で教えるのと同じくらい、不可能なことである。事例によって周囲の条件は変わってくるに決まっているからである。しかし、『自分の頭で考えてみなさい』とその人に強調することは《出来る》。」⁴⁰⁾「考え方のヒント」はこのためにある。

もちろん、「手技としての看護」⁴¹⁾について、「考え方のヒント」を出すことはできないことであった。「この覚え書は、病人のための調理の手引き書でないと同様、看護実技の手引書を目的として書かれているのではない」⁴²⁾「率直に言って、それを書物で学ぶのは無理であると信じている。」⁴³⁾

ナイチンゲールにとって、これほど詳細に看護を語っても、それは、「考え方のヒント」⁴⁴⁾を出ないのであった。環境内存在としての現実には、予測のつかない変化、不確かさにみちているからである。それゆえ、現実には「注意深い看護がきわめて重要である」というほかはない。「注意深い看護」、これは、ナイチンゲール自身が看護実践のなかで果たしてきたことであった。そういう看護を行った者でなければ、これほどこまごましたことを語ることはできなかったはずである。

ナイチンゲールはくりかえし語る。「注意深い看護婦は、つねに病人に眼を

注いでいる」⁴⁵⁾「あくまでも病人の注意深い観察、ただそれのみが最適の食事を決めるうえでの鍵をにぎっている」⁴⁶⁾「自然は明確な法則を持って導いているのであるが、その法則は、病床におけるきわめて注意深い観察によってしか確かめられない。」⁴⁷⁾「良い看護というものは、あらゆる病気に共通するこまごましたこと、および1人ひとりの病人に固有のこまごましたことを観察すること、ただこれだけで成り立っている。」⁴⁸⁾「患者に対するある看護婦の『特殊な能力』や、べつの看護婦の患者に対する能力不足も、前者には何がどう患者を動かすかについての綿密な観察があり、後者にはその観察が欠けている、ということにほかならない。」⁴⁹⁾「他人の生命を救うことができるのは、ただこれらこまごました事柄すべての観察による。」⁵⁰⁾したがって、「綿密で≪正確な≫観察」⁵¹⁾「患者を常時観察している人間の協力がなにかぎり」「日に一回か、もしくはわずかに週に一、二度しか患者と顔を合わせない医師」⁵²⁾は、患者について「なんの情報も得られない」⁵³⁾ことになる。

「注意深い、綿密な観察」は、病人の表情、声、全身の活動および状態のあらゆる変化に向けられる。こうして、看護婦は「観察した現象に含まれている意味を理解する。」⁵⁴⁾したがって、この観察は現象の意味を感受ないし感取する働きである。それゆえ、観察は病人を対象化して、じっと見つめることではない。病人ならずとも、人は「見つめられるのはいや」⁵⁵⁾なのである。この点で、観察は病理学上の観察ではない。「病理学は病気によって人体組織に最終的に起こった変化を教えてはくれるが、そうした病気の経過中に見られる変化の徴候を観察する技術については、ほとんど何も教えてはくれない。」⁵⁶⁾「医師のような職業の者には、もっぱら触診でわかるような持続的で器質的な変化だけを観察する傾向があり、その結果についての意見がまったく観察をしていない人間の意見と同じほど誤っていることがよくある。」⁵⁷⁾むしろ、現在では、「観察が退歩してきている」とナイチンゲールは語る。

「病人が≪病気とどう向かい合っているか≫ということと、看護婦が病人を

《どう看護するか》ということとは、確かに本質的な補完関係にある。この両者の一方は、他方を欠いては完全ではありえない。』⁵⁸⁾ 対象化ではなく、こうした補完的關係において看護の観察が働く。それゆえ、「看護婦のまさに基本は、患者が何を感じているかを、患者にたいへんな思いをして言わせることなく、患者の表情に現れるあらゆる変化から読みとること」⁵⁹⁾ である。「良い看護婦は、患者に向かって、どう感じているか、どうして欲しいか、といった質問などめったにしない。しかしながら、彼女は、自分であろうと他の看護婦であろうと、細心の観察と観察したことの検討を抜きにして患者が感じていることや欲していることが理解できて当然だ、などとはけっして思っていない。』⁶⁰⁾

観察は現象を感受し、読みとることであって、患者に質問して聞き出すことではない。「思慮のない看護婦は『何か私にできることがありますか？』と質問する。』⁶¹⁾ 「食欲はいかがですか」⁶²⁾ 「いかがですか、ご気分は」「よく眠りましたか」など、こうした一般的問いには、病人は答えようがない。答えたとしても、あいまいな答えにしかならない。この問いは病人が個別的な存在であることを忘れている。「それは患者に口を利かせるためだ、と思う人もあろう。』⁶³⁾ だが、この思いは患者を対象化し、補完的關係を破っている。ちなみに、看護婦のみならず、見舞い客などの「おせっかいな励ましと忠告」⁶⁴⁾ は、患者にとって災難というほかはない。

ナイチンゲールによれば、看護婦は、必要のないかぎり患者に話しかけてはならないのである。看護婦はカウンセラーになってはならない。看護婦の基本は、現象の観察であり、それを基点とする行動である。

「病人に接するには、何にもまして簡潔さと果断さとが要求される。病人に対しては、自分の考えを簡潔かつ明確に表現すること。』⁶⁵⁾ 「大切なことは、病室から出るときも入るときも速やかに行動すること」「病室のなかでは、言葉におけると同じく動作においても簡潔にして果断なることが、急がず騒がずの態度と並んで必要である。」「周囲の人間のためらいや優柔不断、これはすべて

の患者にとって恐怖である。』⁶⁶⁾ これを見ると、看護婦はまさに行動する現象学者と呼ぶにふさわしい。

4 看護婦

ナイチンゲールにとって、看護の基本は観察であった。看護婦は観察によって、「患者の顔に現れるあらゆる変化、態度のあらゆる変化、声の変化のすべてについて、その意味を理解《すべき》なのである。』⁶⁷⁾

それにしても、このような観察はどのようにして可能になるのか。

「《正しい》観察がきわめて重要であることを強調するにあたっては、何のために観察をするのかという視点を見失うようなことは、絶対にあってはならない。観察は、雑多な情報や珍しい事実をよせ集めるためにするものではない。生命を守り健康と安楽とを増進させるためにこそ、観察するのである。』⁶⁸⁾ 「このような警告」⁶⁹⁾ は観察の目的を確かにするものであって、けっして無用であることにはならない。

観察の目的が確認されれば、つぎには、観察の場が確かにされねばならない。「看護婦に課す授業のなかで、最も重要でまた実際の役に立つものは、何を観察するか、どのように観察するか、どのような症状が病状の改善を示し、どのような症状が悪化を示すか、どれが重要でどれが重要でないのか、どれが看護上の不注意の証拠であるか、それはどんな種類の不注意による症状であるか、を教えることである。

これらすべては、看護婦の訓練のなかの最も基本的なものとして組み入れられねばならない。』⁷⁰⁾ これによれば、看護婦は、授業における訓練によって、観察の対象、方法、症状の判別、看護のあり方を学ぶという。だが、訓練は観察することそのものを教えるわけではない。訓練は、あくまで知的に示された特定の事柄、つまり対象、方法、判別、あり方などにかぎられている。

観察は無制約的に現象そのものに向けられる。これは、たんなる訓練などに

よって可能になるのではない。「看護婦というわれわれの天職にあっては、そうした正確な観察の習慣こそが不可欠なのである。」⁷¹⁾ さらに、「注意不足による間違いには原因が二つある。(1) とっさのばあいの注意力が足りないこと、すなわち指示されたことを部分的にしか聞かないこと。(2) 観察が習慣化していないこと。」⁷²⁾ とある。

であれば、観察は習慣によって形成されるものであるのか。ナイチンゲールが、観察に「注意深い」「綿密な」という形容詞を冠してきたことを見るならば、観察は注意深さをも含んでいた。すると、観察はたんなる習慣によって培われるものではないことが明らかである。変化する症状の個別性に対して、注意力を含んだ観察は習慣の域を越え出ている。習慣は観察が生かされるひとつの条件にすぎない。

真の看護というものは、「大変に重要でまた難しいことであり、また経験と細心の探究とによる学習がなければ身につけられない技術」⁷³⁾ である。この技術は一般的な操作の技術ではない。それは「学問芸術 (art)」⁷⁴⁾ に近い何かである。またそれを身につける経験は訓練や習慣を超えた何かである。経験から学ぶということは、訓練から学ぶとか習慣から学ぶといったことと同義ではない。どうしても、経験と探究が要るのである。

注意深い、綿密な観察というものが一つの技術であるとはいえ、経験や探究によるものであれば、これは、他人から教えられるものではない。これは、自ら経験し探究するほかはない。もっとも、この技術は、「突然にひらめきを受けて身につけられるような、そんな技術ではけっしてない。」⁷⁵⁾

経験や探究というとき、これは再び観察ということに戻る。注意深い観察は経験から生まれるが、観察がなければ経験は生まれえないからである。ここに、学びのパラドクスがある。「人びとはよく、十年とか十五年とか病人のせわをしてきた看護婦のことを『経験を積んだ看護婦』であるという。しかし、経験というものをもたらすのは観察だけなのである。」⁷⁶⁾

ナイチンゲールは、観察について、「観察の能力」⁷⁷⁾「すぐれた観察能力」⁷⁸⁾などと語っていた。この観察能力は、たんに人体の局部ではなく環境内存在である病人のあらゆる現象を観察するものであった。したがって、このような能力は、能力であることにおいて、形成可能なものであるが、自分自身で学んで形成するほかはないのであった。これを教える方法ではなく、それゆえ、訓練、学習、習慣化などで形成できるものではなかった。

そうであるからこそ、ナイチンゲールは「覚え書」において、くりかえし問いを投げかけ、考えること、探求することを求めたのであった。ちなみに、「病人をあずかっている責任者に<<管理>>するとはどうすることかを書物で教えようとしても、それはちょうど看護の仕方を書物で教えるのと同じくらい、不可能なことである。事例によって周囲の条件は変わってくるに決まっているからである。しかし、『自分の頭で考えてみなさい』とその人に強調することは<<出来る>>。」⁷⁹⁾

問いの投げかけ、考えることの勧告は、無意味ではない。これによって、人はみずから問い、探求することになるからである。これによって、看護婦は注意深い観察の能力を身につけるのである。

この能力は、観察とはいえ、たんなる観察ではなく判断する観察である。そもそも、現象の観察において、判断のない観察はない。そして、この観察も探求にかかっている。「患者に生じる結果についての正確な判断を下す能力は、そのすべてが患者をとりまくあらゆる条件や状況の探求ということにかかっている。」⁸⁰⁾したがって、ナイチンゲールにおいては、探求が観察能力の原点であるが、現実においては、探求と経験と観察の能力とは分かち難いものとして働いている。

看護の観察は、病人とそれを囲む環境を読み取り、判断する「特殊な能力」⁸¹⁾である。これは、岩石や草木や昆虫などの観察、いわば科学的な観察能力ではない。それゆえ、「科学的知識を何も持っていない人でも」⁸²⁾、この能力をもつ

ことができる。

観察の能力について、なおも、ナイチンゲールは語る。「教育の仕事はおそらく例外であろうが、この世の中に看護ほど無味乾燥どころかその正反対のもの、すなわち、自分自身はけっして感じたことのない他人の感情のただなかへ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しない。——そして、もしあなたがこの能力を全然持っていないのであれば、あなたは看護から身を退いたほうがよいであろう。」⁸³⁾「看護婦は、十分に訓練された、また鋭敏な感受性を身につけていることが必要なのである。」⁸⁴⁾

ナイチンゲールは、観察の能力の基底に他人の感情をくみとる能力があると見ている。これは、自己の境界を越え出ること、かつてヒュームやスミスが唱えた共感の能力に近いものであろう⁸⁵⁾。共感は、まさに感情を共にし、他者を気づかい、配慮する力である。こうした力が看護の観察の基底にあるのであった。

むすび

ナイチンゲールは看護の精神を語る。看護婦は、「細やかで豊かな感性を持つ女性でなくてはならない。」⁸⁶⁾ 女性特有の身体および感受性によって、「女性は誰もが一生のうちにはいつかは看護婦にならなくてはならないのであれば」⁸⁷⁾、ナイチンゲールにとって、女性が看護にふさわしいのは自明のことであった。よって、看護婦という職業も女性にふさわしいのである。「看護婦は自分の職業を尊ばなければならない。」⁸⁸⁾ そして、人に頼りにされうる「『信頼のおける』看護婦」⁸⁹⁾ でなければならない。病人のことについて、「噂をふれ歩くような人間であってはならない。」⁹⁰⁾

看護という職業は、ただ、これだけのことではない。この職業は崇高な精神に支えられている。看護婦は「信仰深く献身的な女性でなければならない」⁹¹⁾ のである。それゆえ、「『使命感』を持つ看護婦」⁹²⁾ 「天職としての看護婦」⁹³⁾

「看護婦というわれわれの天職」⁹⁴⁾ という。

これは、信仰の厚いナイチンゲール自身の生き方を表わしたものであったが、それは、また、当代の看護に気高さという精神性を打ち込み、その地位を高めたのであった。

わが国では、ナイチンゲールは、看護に科学を導きいれて、看護を科学にまで高め、さらに、看護に精神としての使命感を導きいれ、看護という仕事を崇高な職業に高めた、と目されてきた。

看護における科学と精神。ところが、前者は、看護を科学であるとするところによって、看護から、疾患だけを残して、病人を追放してしまった。後者は、ナイチンゲール誓詞に見られるように、看護に精神主義をもたらし、心的抑圧となった。科学と精神のいずれも、看護という仕事に、ストレスを導きいれたのである。現在の看護における燃え尽き症候と言われるものも、これと関わりがないわけではない。

ナイチンゲールには、後世の人たちに、自分の「覚え書」がこのように理解されることは、きわめて不本意であったにちがいない。この「覚え書」の真髄は、科学と精神の間に広がる、果てしない人間的地平にあったからである。この地平、すなわち人間が生きる現実を観察すること、これが看護の基点である、とナイチンゲールは語っていたからである。こうした理解は、現代の看護および看護学が、いまもって見落としている陥穽である。

ところで、ナイチンゲールの看護が明かにされたからには、さらに、そうした看護を実践する看護婦はどのようにして教育されるか、という問いが生まれるであろう。

ナイチンゲールは、看護婦の教育を、学校という組織のなかで行なおうと試みたのであった。この点でも、ナイチンゲールは、近代的看護教育の開祖として、歴史的意義をもっている。さらなる問いは、その歴史的意義のみならず、看護教育の内実はいかなるものであるか、ということである。このことについて

ても、ナイチンゲールは豊かな洞察を示しているのではないか。これが、探求されるべき次の課題である。

注

- 1) Florence Nightingale : Notes on Nursing, 1860 『看護覚え書』湯楨ます 他訳、現代社、2000, p.1
- 2) 同 p.2
- 3) J.H. van den Berg 講演 (1981.5.2 福岡市)
- 4) 前掲訳書『看護覚え書』 p.16
- 5) 同 p.13
- 6) 同 p.14
- 7) 同 p.14
- 8) 同 p.15
- 9) 同 p.14
- 10) 同 p.107-108
- 11) 同 p.108
- 12) 同 p.222
- 13) 同 p.222
- 14) 同 p.61
- 15) 同 p.200-201
- 16) 同 p.201
- 17) 同 p.221
- 18) 同 p.221-222
- 19) 同 p.222
- 20) 同 p.222
- 21) 同 p.222
- 22) J.H. van den Berg 講演
- 23) 前掲訳書『看護覚え書』 p.27
- 24) 同 p.33

- 25) 同 p.24
- 26) 同 p.81
- 27) 同 p.83
- 28) 同 p.104
- 29) 同 p.105
- 30) 同 p.106
- 31) 同 p.102
- 32) 同 p.160
- 33) 同 p.160
- 34) 同 p.69
- 35) 同 p.127
- 36) 同 p.127
- 37) 同 p.128
- 38) 同 p.173
- 39) 同 p.196
- 40) 同 p.64-65
- 41) 同 p.214
- 42) 同 p.214
- 43) 同 p.214
- 44) 同 p.16
- 45) 同 p.31
- 46) 同 p.126
- 47) 同 p.127
- 48) 同 p.197
- 49) 同 p.197
- 50) 同 p.198
- 51) 同 p.129
- 52) 同 p.128
- 53) 同 p.128

- 54) 同 p.229
- 55) 同 p.229
- 56) 同 p.220-221
- 57) 同 p.202
- 58) 同 p.79
- 59) 同 p.227
- 60) 同 p.238
- 61) 同 p.187
- 62) 同 p.185
- 63) 同 p.238
- 64) 同 p.164
- 65) 同 p.96
- 66) 同 p.98
- 67) 同 p.228
- 68) 同 p.210
- 69) 同 p.210
- 70) 同 p.178
- 72) 同 p.192
- 73) 同 p.223
- 74) 同 p.223
- 75) 同 p.223
- 76) 同 p.229
- 77) 同 p.200
- 78) 同 p.229
- 79) 同 p.65
- 80) 同 p.203
- 81) 同 p.197
- 82) 同 p.197
- 83) 同 p.227

84) 同 p.207

85) D.Hume : A Treatise of Human Nature, ed by L.A.Selby-Bigge, Oxford, Clarendon Press, 1928, p.316

A.Smith : The Theory of Moral Sentiments, 8th ed., London, Printed for A. Strahan, and T.Cadell ..., 1797. Vol.1, p.359

86) 前掲訳書『看護覚え書』 p.212

87) 同 p.2

88) 同 p.212

89) 同 p.211

90) 同 p.211

91) 同 p.212

92) 同 p.232

93) 同 p.40

94) 同 p.189